



2010年(平成22年)
4月号(No. 779)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成21年度第2回通常総会開催	
22年度は超緊縮予算で	1
平成22年度事業計画	3
平成22年度収支予算書	5
雪山にも若者たちがもどってきた	6
万博から40年、国立民族学博物館に	
ちなんだふたつのイベント	7
東西南北	8
日華友好玉山開山祭と記念登山	
北限の富士山展望	
支部だより	10
秋田支部/京都支部/	
福岡支部	
活動報告	12
科学委員会/集会委員会	
図書紹介	14
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
INFORMATION	18
図書受入報告	18

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

平成21年度第2回通常総会開催 22年度は超緊縮予算で

高橋重之

平成21年度の第2回通常総会が、3月13日に開催された。ここ数年、会員の高齢化とともに会員数が減少し、会費収入に活動の多くを負っている山岳会の財政が大変厳しい状況を迎えている。そうした総会の模様を、高橋会報編集委員に報告してもらった。

平成21年度第2回通常総会が3月13日午後2時から東京・六番町の主婦会館ブラザエフで開かれた。会員137人が出席し、平成22年度事業計画・収支予算案について審議した。いずれも原案どおり可決承認されたが、かつてない緊縮予算を前に、日本山岳会の厳しい現状を知った。ぱつさり削られた予算案には、息をのむ思いだった。

■会長あいさつ 厳しい現状の認識を

総会は宮崎絃一副会長の司会に進められた。総会に先立ち、尾上昇会長は次のように挨拶した。

一、日本山岳会の最大の問題は、入会者より退会者が多いことだ。これがもたらす影響は、会費の減少だ。今年度の収入も、まだ締めてはいないが、前年度に比べ30

0万～400万円ぐらい減少している。単年度の問題ではなく、来年も再来年も続くことになる。このまま放っておけば、会勢が衰えていき、会員サービスが維持できないことになる。

一、急務は会員を増やすことだ。とくに若い人の入会をカンフル剤としたい。ドラスチックに実現させることは難しく、私を含め執行部でそれなりに考えてきたのが4つのプロジェクトだが、今回は誠に残念ながら予算計上は通信費程度とせざるを得なかった。プロジェクトに振り向ける余裕がない。翼をもがれた鳥と同じ。たいへんきつい現状である。

一、大きな光は若い人が燃えていることだ。「会の再生は、われわれでやる」という息ごみで働いてい

ただいている。若い人たちの力が起爆剤となり、会の再生へ明るい光が見えてくることを確信している。

■事業計画 4つの再生プロジェクト

この日の総会には2887通の委任状が提出された。会員数は5251人。出席者・委任状提出者を合わせると、会員の3分の1を上回っており、総会が有効に成立したことを確認、議事録の署名人には宮川美知子、松島岳生の両会員を指名した。

議案審議を開始した。事業計画には、冒頭に「日本山岳会再生プロジェクトの推進」を掲げ、4つのプロジェクトの事業内容を具体的に示した。事業計画は宮崎副会

長がひととおり説明(3・4ページ参照)したのち、プロジェクトごとにリーダーが補足説明。収支予算案は岡部総務担当常務理事が説明した。

法人改革対応(藤本慶光副会長)
公益法人になった場合のメリットとデメリットを6月には提示し、最終的に来年3月もしくは6月に方向を決め、申請作業に入る。新しいガイドラインが5月にも提示される見通しだ。中立的な立場でデータを提示する。

JAC-YOUTH(野澤誠司理事) 39歳以下の日本山岳会会員は約100人、49歳以下の会員は約400人。危機的な状況だ。供給源だった大学山岳部が衰退している。廃部となった大学もあり、2ヶ台の部員をかかえているのは3校にとどまる。指導する人もなく教育システムが崩壊している。公益活動として冬に、山スキー、スノーボードなどの講習会を実施しており、すでに80人ほどの修了生がいる。日本山岳会への入会を勧め、さらに一般登山などグリーンシーズンに活動を広げていきたい。

支部活性化(神崎忠男副会長)
活性化というより、当面は支部

づくりだ。東京多摩支部が全国29番目の支部として発足した。続いて埼玉支部が設立される。四国でも声が上がっており、群馬でも動いている。ひとりでも多くの会員が支部活動に参画してもらうことを目指し、また支部で会員を10割増やしてもらいたい、と思っている。全国支部会員は3200人なので320人が増える勘定だ。支部で会員サービスを充実し、クラブライフを楽しんでいただきたい。

「山の日」制定(成川隆顕常務理事)
日本山岳協会、日本山岳ガイド協会などと「山の日」制定運動を共同で進めることで合意した。いまPRのチラシづくりを進めている。5・10万枚の数のチラシを各支部、関連省庁・団体等に配布したい。活字媒体だけでなく、インターネットも立ち上げる。登山を奨励する全国規模のイベントを展開したい。

■収支予算案

当期収支398万円の赤字に

22年度は厳しい予算を組まざるを得なかった。会費・入会金収入は、前年度比197万円減の5972万円。事業収入は同190万

円減の460万円で、事業活動収入合計は同449万円減の6684万円。当期収支は予算の段階から398万円の赤字を余儀なくされた。

削れるものは、どんどん削った。管理費は前年度に比べ369万円の増加となったが、これは修繕費に300万円計上したためだ。ルーム201号室を300万円かけて元に戻して撤去、翌年度から年間324万円の賃貸料を節約する。4つの再生プロジェクトについては事実上ゼロとした。なんとかしたかったが、できなかった。

対応策として、①会費を値上げする、②寄付金を募る、③基金・積立金を崩す、でまかなうことが考えられるが、値上げするような情勢ではない。基金・積立金の取り崩しについては、ルールが決まっている。6月に開く22年度第1回総会までにルールを決めて諮りたい。

■質疑・応答

基金取り崩しでの補正も

質疑・意見表明が相次いだ。尾上議長は出席者に対し再三再四、質問するよう促した。出席者も、

これに答え、会の財政に対する真剣な議論が続いた。質疑応答のなかで、基金・積立金を取り崩すなど、財源を捻出するの補正を次の総会に出すことが示唆された。

有元利通会員(9703) 支部のなかに一般法人として登録したという話があるが、本当か。

藤本副会長 法人改革が進むなかで、支部という立場が不明瞭だ。新しいガイドラインでどうなるのか。しかし、支部が独自で動くというような話は、本部として関知していないし、情報も得ていない。支部と連絡を取り合っていきたい。

臼木博信会員(12416) 事業計画の半分以上は落とさないとダメではないのか。支出をとまなうものは、早急に削るべきだ。

富澤克禮会員(12425) 自然保護委に所属している。全体に減っているなかで、調査研究費が66万円増えているのはなぜか。委員会には、いつ細目が知らされるのか。

岡部常務理事 調査研究費の増加はインターネットの改善などに必要な経費。自然保護委の予算はばつさり削った。全国集会の旅費もゼロにせざるを得なかった。会

(社)日本山岳会 平成22年度事業計画(主な事業)

平成22年4月1日～平成23年3月31日

山岳会再生プロジェクトの推進

■法人改革対応検討プロジェクト

- ① 2009年度に実施した各種作業を「中間報告」として理事会に提出した。
- ② 中間報告に基づき、理事会で「公益法人」「一般法人」「一般法人を経由して公益法人」の三つの選択肢について検討する。
- ③ 会員に対して各選択肢のメリット、デメリットを提示して、各自の検討を促す。
- ④ 5月に予想される公益認定等委員会の新たなガイドラインを再度検討して対応を討議する。
- ⑤ 2010年度内で十分な検討を行ない、2011年度の総会に日本山岳会としての方向を提案する。

■JAC-YOUTHプロジェクト

- ① 若い会員の入会促進を図る。
- ② 学校山岳部の部員のスキルアップを図る。
- ③ JACの将来を担うリーダーの育成。
- ④ 非会員の若い人達を対象とした各種の机上講習会や登山講習会の実施。
- ⑤ 地方支部の若い会員や若い登山家(非会員)を対象とした登山研修会の支援と実施。
- ⑥ 優れた海外登山の実施。

■支部活性化プロジェクト

- ① 未組織地域の支部化。平等、公平性など格差の是正。
- ② 支部現状の把握。アンケートなど情報の整理。情報の共有。
- ③ 支部運営、活動の活性化への協力、支部活性化事業の開催と支援。
- ④ 会員参画の強化、会員サービス、社会貢献など公益、共益活動の調整。
- ⑤ 本部と支部の連携、支部の役割など効果的な運営体制の確立。

■「山の日」制定プロジェクト

- ① 会員への周知徹底と30支部との連携強化。
- ② 日山協、労山など山岳団体との連携＝(仮)連絡協議会の設置、運営。⇒実行委員会設置。
- ③ PRチラシづくり。国民運動としての広がりへ向けて広報活動。
- ④ 関連省庁、自治体、団体、企業、メディアなどへの働きかけ、参加・協賛要請。
- ⑤ イベント企画・実施。インターネット(ホームページ)の立ち上げ、運営・管理。

1. 公益目的事業

(1) 登山に関する文化・学術の振興事業

4月～11月	ミニ水力発電装置運用(山研)
4月～1月	海外登山クロニクル4回開催(海外)
5月	『Japanese Alpine News』Vol.11の発行(英文ジャーナル)
5月	『山岳』105年(2010年)の発行(山岳編集)
6月5日～6日	ウェストン祭(信濃)
10月	第14回全国山岳博物館等連絡会議(資料映像)
12月	第12回秩父宮記念山岳賞
通年	会報『山』779号～790号の発行(会報)
通年	図書館の整備・研究(図書管理・図書)
通年	登山資料・山岳絵画の整備(資料映像)
随時	図書の閲覧、貸し出し(北海道)

(2) 児童・青少年の育成事業

4月～10月	登山教室(京都)
5月	JAC会員と一緒に登ろう(山形)
7月19日	青少年体験登山(東九州)
7月下旬～8月上旬	第11回自然児学校(北海道)
8月	上高地ボランティア活動(自然保護)
8月	子供登山教室(宮崎)
8月中旬	サマーキャンプ(広島)
9月	JAC会員とエコ登山(山形)
12月	冬山気象講習会(JAC-YOUTH・指導)
12月	救急救命講習会(JAC-YOUTH・指導)

報を郵送で送っているが、ネットや手渡しで配布してもらいたい。

和田豊司会員(6797) 本部の事業計画案と予算案との関連がみえてこない。本部の事業には予算がついているが、支部の事業には投入されていない。事務の仕事などを支部はボランティアでやっている。本部でも時間に余裕のある会員の活用を考えてほしい。カネがないから削るというだけでなく、登山教室などで収入を増やすことも考えてほしい。

岡部常務理事 『山岳』や会報

『山』、山研などは本部だけの経費ではない。これらを除くと本部委員会予算は指導委や集会委などを入れて139万円くらいだろう。本部だけがいい思いをしているわけではない。

尾上会長 固定費の削減は常務理事会などで、常に話し合っている。収益事業は、公益あるいは一般法人になっても規則はない。ご意見を真摯に受け止め、事業計画などに反映させていきたい。

芳賀孝郎会員(4637) 永年会員として2年前から会費を払っ

ていない。会報などを送っていたいているのだから、振替用紙を入れて「協力」をお願いしてはいいか。

宮崎副会長 50年間、払い続けてきて、指折り数えて永年会員になるのを待っていた会員から会費を取ることはできないが、「協力」をお願いすることは考えたい。

金中和和員(13939) 会員の息子で山に行っている、あるいは山に行きたいという方を対象に「親子会員」制度をつくってはどうか。YOUTHにもつなが

る。

宮崎副会長 参考にさせていたきたい。どういう仕掛けをつくるかを含めて検討していきたい。

中山茂樹会員(11319) 基金・積立金には、どのようなものがあるのか。取り崩して財源にできないか、みなさんの意見を聞きたい。

岡部常務理事 基金・積立金は、決算資料の貸借対照表のなかで明示している。昨年3月末の決算では、長期計画積立金2624万円、

(5ページ)

通年 高尾の森づくり（自然保護）
 通年 猿投の森づくり活動と調査活動（東海）
 年3回 支笏湖復興森づくり事業（北海道）

（6）国際交流事業

5月14日～20日 日中韓学生交流登山（学生）

（7）その他目的を達成するための事業

山岳遭難の予防と対策に関する関係団体との協議
 国内関係団体（日本山岳協会、東京都山岳連盟、日本ネパール協会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳ガイド協会、日本ヒマヤン・アドベンチャー・トラスト、日本山岳文化学会）との連携
 海外登山団体との情報交換および機関誌の交換等
 国内博物館・美術館との提携
 「上高地山岳研究所」の運用
 登山記録等の保存・整備

2. 共益事業（会員のための事業）

（1）登山、集会、施設の運用等

4月 学生部所属大学山岳部新入部員歓迎会（学生）
 4月・11月 歴代会長講演会（資料映像）
 5月 第40回山岳図書を語る夕べ（図書）
 5月1日～5日 鯉岳春山合宿（京都）
 5月22日～27日 熊野古道（集会）
 6月 海外トレッキング（モンゴルでの森）（東海）
 6月5日～6日 新入会員のための徳本峠越えとウェストン祭（山研）
 6月7日 50周年鶴見岳記念山行（東九州）
 6月12日～14日 残雪の岩手山（集会）
 6月19日・随時 土曜懇話会（集会）
 7月 第19回山を語る（図書）
 7月 クライミング集会（学生）
 7月 支部創立25周年記念事業（宮崎）
 7月10日～19日 欧州アルプス（集会）
 8月6日～8日 南アルプス（集会）
 8月10日～20日 ロッキー山脈（集会）
 9月 5支部合同懇親山行（石川）
 9月 北アルプス集中登山（集会）
 9月22日～26日 槍ヶ岳集中登山（北九州）
 10月 新入会員オリエンテーション（総務）
 10月16日～17日 紅葉山行（集会）
 11月 第39回山岳史懇談会（図書）
 11月 学生部所属大学山岳部マラソン大会（学生）
 11月 九州5支部集会（熊本）
 12月4日 平成22年度年次晩餐会（総務）
 12月5日 晩餐会記念山行（集会）
 1月 第41回山岳図書を語る夕べ（図書）
 2月 アイスクライミング集会（学生）
 2月 3支部合同懇親会（栃・茨・千）（栃木）
 3月 第28回図書交換会（図書）
 通年 インターネットホームページの運営（インターネット）
 通年 支部創立50周年記念50山ラリー実施（東海）
 隔月 機関誌『木の目草の芽』の刊行（自然保護）

（2）海外登山等

（3）会議等

通常総会の開催（6月12日・平成23年3月）
 支部活性化プロジェクト推進
 法人改革対応検討プロジェクト推進
 JAC-YOUTHプロジェクトの推進
 「山の日」制定プロジェクトの推進
 理事会の開催（11回）
 常務理事会の開催（11回）
 支部長会議（5月・9月・12月）
 支部事務局担当者会議の開催（2月）
 評議員会の開催（随時）
 同好会・同期会連絡会議（6月）

1月 BC雪崩講習会（指導）
 1月 雪山入門講習会（雲取山）（指導）
 2月 BC講習会（指導）
 3月 雪山実践講習会（ハッ岳）（指導）
 年3回 宮崎家庭裁判所少年委託登山（宮崎）
 随時 大学生の指導・育成（広島）
 随時 東海学生山岳連盟への支援活動（東海）
 通年 関西の学生組織設立（京都）

（3）スポーツ及び登山に関する教育・啓蒙事業

5月22日～23日 奥会津の豪雪地形観察と蒲生岳登山（科学）
 5月29日～30日 白山開山泰澄祭（福井）
 5月上旬 第25回播磨祭の開催（富山）
 6月・9月 登山教室（第4回・第5回）（熊本）
 6月12日～13日 「今西レリーフを守る会」講演会（京都）
 7月10日 第6回山の博覧会（山梨）
 7月15日 講演会「夏山の気象」（科学）
 7月25日 高頭祭・新潟県登山祭・弥彦山明登山祭事業（越後）
 7月上旬 気象講座（岩手）
 7月・9月・11月 楽しい登山研修会（第1回～第3回）（熊本）
 9月下旬 藤木祭（関西）
 9月25日 シンポジウム「静岡県山の山」（静岡）
 10月 ヒマラヤ登山の報告会（栃木）
 10月 第3回九州脊梁山脈縦走登山（熊本）
 11月 第26回宮崎ウエストン祭（宮崎）
 11月6日 支部50周年記念講演会（東九州）
 11月14日 第17回視覚障害者支援登山（東九州）
 12月 写真展（岐阜）
 1月 「岳人のつどい」講演会（福岡）
 2月 海外登山助成金の交付
 2月 シンポジウム「山を楽しくする科学」（科学）
 年4回 登山教室（東海）
 年2回 視覚障害者支援登山（東海）
 随時 オホーツク分水嶺踏査（北海道）
 通年 陀羅仏小屋の一般開放（京都）
 通年 分水嶺踏査（千葉）
 通年 山梨二百山選定・踏査（山梨）
 通年 近畿分水嶺踏査（関西）

（4）事故防止事業

2月 積雪期登山講習会（京都）
 5月8日～9日 第30回登山医学シンポジウム（医療）
 5月・12月～1月 登山者のための天気予報
 11月 県警救助隊講演会（指導）
 12月 救急救命講習会（京都）
 年1回 セルフレスキュー講座（関西）
 随時 高所医学の最新文献を紹介（医療）

（5）山岳環境保全事業

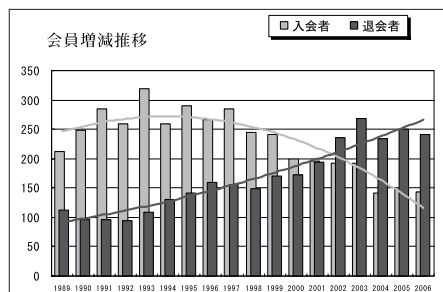
4月～12月 権現の森林づくり（岐阜）
 6月12日～13日 自然保護全国集会（自然保護・福岡）
 6月13日～14日 研修ツアー（霞ヶ浦）（自然保護）
 6月 自然観察会（山形）
 6月 宮崎支部水源の森育林作業（宮崎）
 6月・9月 白神山地ブナ林再生事業（青森）
 7月 奥日光清掃登山「山の日」事業（栃木）
 7月 自然観察会（石川）
 7月 宮崎支部水源の森育林作業（宮崎）
 9月 猛禽類の森づくり（山形）
 9月 那須岳周辺清掃（栃木）
 9月上旬・3月 自然観察会（茨城）
 10月 自然観察会（千葉）
 10月30日～31日 森の勉強会（京都）
 11月 森林保全巡視登山（熊本）
 12月 清掃登山（宮崎）
 2月 宮崎支部水源の森育林作業（宮崎）
 3月27日 英彦山の清掃登山（北九州）
 4月～11月 CBD-COP10 パートナースhip事業（東海）

平成22年度 収支予算書

平成22年4月1日～平成23年3月31日まで

科 目	平成22年度予算額	前年度予算額	増 減
2. 事業活動支出			
事業費			
出版事業費	10,400,000	10,900,000	- 500,000
図書管理事業費	180,000	300,000	- 120,000
調査研究事業費	2,360,000	1,700,000	660,000
指導研究事業費	400,000	430,000	- 30,000
支部事業費	8,000,000	11,000,000	- 3,000,000
海外事業費	150,000	150,000	0
山岳研究所事業費	1,000,000	1,820,000	- 820,000
山岳研究所管理費	2,500,000	3,070,000	- 570,000
ミニ水力発電運営費	80,000	150,000	- 70,000
海外登山補助費	1,500,000	1,500,000	0
その他事業費	9,000,000	9,000,000	0
印刷・製本費	500,000	500,000	0
刊行物発送費	4,000,000	4,200,000	- 200,000
事業費計	40,070,000	44,720,000	- 4,650,000
管理費			0
給料手当	12,500,000	12,000,000	500,000
文具消耗品費	100,000	100,000	0
印刷・製本費	1,200,000	1,250,000	- 50,000
旅費交通費	700,000	700,000	0
通信運搬費	650,000	650,000	0
火災保険料	183,000	183,000	0
修繕費	3,000,000	60,000	2,940,000
租税公課	880,000	580,000	300,000
光熱水道料費	620,000	620,000	0
電話料	300,000	300,000	0
会議費	100,000	100,000	0
什器備品費	300,000	300,000	0
振替手数料	650,000	650,000	0
福利厚生費	1,600,000	1,600,000	0
事務所管理費	1,500,000	1,500,000	0
その他管理費	1,800,000	1,800,000	0
負担金	30,000	30,000	0
賃借料	3,240,000	3,240,000	0
雑費	600,000	600,000	0
管理費計	29,953,000	26,263,000	3,690,000
事業活動支出計	70,023,000	70,983,000	- 960,000
事業活動収支差額	-3,180,000	352,000	- 3,532,000

科 目	平成22年度予算額	前年度予算額	増 減
II 投資活動収支の部			
投資活動支出			0
特定預金支出			0
終身会費積立金支出	200,000	200,000	0
退職給与引当預金支出	100,000	100,000	0
投資活動支出計	300,000	300,000	0
投資活動収支差額	300,000	300,000	0
III 予備費支出			
予備費	500,000	2,000,000	- 1,500,000
当期収支差額	- 3,980,000	- 1,948,000	- 2,032,000
前期繰越収支差額	6,456,806	7,165,283	- 708,477
次期繰越収支差額	2,476,806	5,217,283	- 2,740,477



2002年を境にして退会者が入会者を上回ってきた

科 目	平成22年度予算額	前年度予算額	増 減
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
基本財産運用収入			
基本財産利息収入	15,000	15,000	0
会費・入会金収入			0
入会金収入	2,000,000	2,200,000	- 200,000
通常会費収入	57,628,000	59,300,000	- 1,672,000
終身会費収入	100,000	200,000	- 100,000
会費・入会金収入計	59,728,000	61,700,000	- 1,972,000
事業収入			0
広告料収入	1,500,000	2,300,000	- 800,000
印税収入	0	0	0
刊行物売上収入	200,000	200,000	0
山研使用料収入	1,700,000	2,000,000	- 300,000
その他事業収入	1,200,000	2,000,000	- 800,000
事業収入計	4,600,000	6,500,000	- 1,900,000
補助金等収入			0
補助金収入	1,000,000	1,500,000	- 500,000
寄付金収入			0
寄付金収入	0	0	0
雑収入			0
受取利息	300,000	320,000	- 20,000
雑収入	1,200,000	1,300,000	- 100,000
雑収入計	1,500,000	1,620,000	- 120,000
事業活動収入計	66,843,000	71,335,000	- 4,492,000

終身会費積立金1042万円、海外登山基金5880万円、遭難防止事業基金1000万円などだ。

尾上会長 取り崩せるものと、そうでないものがある。崩せるものがあれば活用したいという意見と解釈させていただきたい。

和田会員 基金・積立金を取り崩すという話には大賛成だ。必要な時期に使うのは当然のことだ。若い人を入れようというのに、お金をかせないなんて考えられない。

尾上会長 費用対効果が求められることになるだろう。財務委と

も意見交換させていただいた。

村井龍一会員(5091)「入るを量りて、出ずるを制す」が会の基本原則だったと、会長には説明させていただいた。

尾上会長 決定しているわけではなく、時期もいつか分からないが、補正予算というような形で、4つの再生プロジェクトに予算をつけ、会を再生させていきたい。

篠崎仁会員(7343) 終身会費積立金は、該当会員が亡くなった時に取り崩す性格のものだ。このへんから手をつけていいのでは。

トピックス

雪山にも若者たちがもどってきた

古野 淳

大学山岳部の灯が消えかけている。OBと基金、山小屋は残ったが、山岳部は消滅状態だ。新人が入っても指導者がいない。20歳から30歳代のリーダー育成が急務となった。

指導委員会では、4期目のバックカントリー講習会を終了させた。

講習修了生は70人になった。雪山でのセルフレスキュー技術が中心だが、「以前より慎重に行動するようになった」との声を聞く。そして今年から雪山登山講習会も始めた。40歳未満の若い人、という年齢制限の募集はほかの組織では聞いたことがない。賛否両論あると思うが、若手リーダー養成が目的である。雪山登山入門机上講習と3回の実地講習だった。2月の雲取山（雲取山荘1泊）、3月の硫黄岳（赤岳鉱泉1泊）、4月の鳳凰三山（テント2泊）で行なった。実地講習生は、のべ27人（女性15人、男性12人）、そして参加者の平均年齢はなんと32歳である。プロ

ガイドが指導をして、JACスタッフをサポートを行なった。

初回の雲取山では低山とはいえ、強烈な冬の気圧配置となり出だしでしごかれた。硫黄岳と鳳凰三山は天候に恵まれ、素晴らしい雪山の景色と参加者の歓声が印象に残った。募集方法はネットと雑誌告知。ほとんどがネット検索で募集を知り参加したという。申込みから最終案内までネット上で完結しているの、仕事の忙しい参加者にも好評だった。彼らは、北アルプスの夏山縦走程度の経験はある。装備の知識もあり、若者らしくウエアはいいものを使っている。しかし、交通費節約のため鈍行列車で来る人もいた。

雲取山は講習生7人と松原尚之ガイド、ほかにスタッフ6人。歩行技術と読図講習を行なった。硫黄岳は講習生13人と松原、奥田仁一ガイド、ほかにスタッフ2人で、アイゼン歩行技術、滑落停止、雪崩ピットチェックとビーコン搜索



ハケ岳で雪山技術を学ぶ講習生たち

訓練。鳳凰三山は講習生7人と松原、奥田ガイドとスタッフ3人で、生活技術、読図技術、ビバーク技術とケガ人搬送訓練を行なった。

アイゼン歩行は、山慣れしているせいか、引っかけて転ぶ人はいなかった。体力も申し分ない。雪崩ビーコン搜索訓練は真剣だった。仲間が埋められたと想定し、経過時間を告げ、生存限界が近づいてくるので必死だ。ケガ人搬出訓練は、ザックやツェルトなど持つている装備だけを応用して背負子やソリをつくり、遭難救助経験の豊富な登山ガイドだからこそできる実用的な技術を教わった。一番勉強になったのは雪山テント生活だ

ろう。雪上幕営、濡れない工夫、水作りの大変さ、狭いテント内の整理整頓、夜の寒さなど、初めてのことはかりで新鮮だったに違いない。

山小屋やテント生活は楽しかった。膝をつき合わせるような狭い場所、ガイドやスタッフからヒマラヤをはじめ各地の山の話の直接聞いたのもよかった。講習生にユニークな経歴の人もいて自己紹介も楽しい。興味や悩みも聞くこともできた。これからのいい登山をしてもらいたいと思う。

山に若者たちがもどってきたという。しかも大量に。富士山40万人、高尾山250万人は記録的な数字である。26歳から40歳は、「ロストジェネレーション」と言われる就職氷河期を経験した世代で、その後も不況で楽ではない。「バブル経済」世代のような浮かれた気質はない。彼らが夏山にもどってきて、さらに雪山も積極的に体験しようとしている。少数で参加して、技術を学び、友人たちに伝えようとしているのだ。いよいよ今年度からJAC-YOUTHが始まる。すでに下地はできている。きつと成功するだろう。

カルチャー

万博から40年、国立民族学博物館に ちなんだふたつのイベント

神長幹雄

1970年、大阪・千里で日本万国博覧会が開かれた。日本が高度経済成長に邁進するなか、6400万人の来場者で大変な賑わいをみせた。その会場の跡地に国立民族学博物館が設立され、現在も多くの来場者が訪れている。

このほど国立民族学博物館にちなんだイベントが、4月から5月にかけて開催される。ひとつは「梅棹忠夫・山と探検文学賞」協賛によるブックフェアとトークショーであり、もうひとつは「民族学者とヒマラヤ、南極」と題した映画会である。

国立民族学博物館の生みの親であり、長年、館長を務められた梅棹忠夫さんは、今年90歳の卒寿を迎えられる。フィールドワークを基本に独自の文明論を展開し、山や学術探検に多くの足跡を残してきた。現在も未知への探求（デジデリウム・インコグニチ）の大切さを強調する。そうした梅棹さん

の業績を顕彰し、山や探検に関連する著作を対象にした「梅棹忠夫・山と探検文学賞」が創設されることになった。

協賛イベントであるブックフェアは、長野市の平安堂書店で、内外から200冊の書籍を集め、「山岳」「大地」「砂漠」「極地」「宇宙」などのジャンルに分けて、5月8日から1カ月にわたって行なわれる。あわせてトークショーも開催される。

第1回（5月8日）は「人類の行く末」と題して、関野吉晴氏（探検家・医師）と江本嘉伸氏（地平線会議）。第2回（15日）は「梅棹忠夫の山と探検と学問」と題して、石毛直道氏（元国立民族学博物館長）と小山修三氏（国立民族学博物館名誉教授）。第3回（22日）は「垂直の記憶」と題して、沢木耕太郎氏（作家）と山野井泰史氏（登山家）。第4回（29日）は「水平の彼方」と題して、白石康次郎

氏（海洋冒険家）と山崎哲秀氏（極地探検家）が当たる。各回とも15時から、ウエスト・プラザ5階（JR長野駅前）で。1回券1000円、4回券3000円。

一方、「民族学者とヒマラヤ、南極」は、昭和30年代の記録映画を4回にわたって再上映しようというもの。万博に先だつこの時代に、劇場用の記録映画は、日本人の目を海外に向けさせた。多くの映画が文部省特選となり、学生たちも課外授業でこれらを鑑賞したため、人類学という新しい学問が普及するのに大きく役立った。

上映されるのは、4月24日『マナスルに立つ』（1956年）、5月1日『カラコルム』（1956年）、8日『花嫁の峰チヨゴリザ』（1959年）、6月5日『南極大陸』（1967年）の4本。話題を呼んだ作品ばかりだ。また、いずれの作品も、旧制京都一中から三高、京都大学へと進んだ同世代の3名（登山家であり研究者でもある今西錦司、西堀栄三郎、桑原武夫）に関係している。そして彼らの流れを継承しているのが、梅棹さんだ。上映は国立民族学博物館講堂で、13時30分から。映画会のみ無料。

今回、このイベントを企画した飯田卓（国立民族学博物館准教授）さんは、最近の時代背景を次のように語ってくれた。

「近年、若い人たちが、手軽になつたからか、海外旅行に憧れを抱かなくなっているといわれます。

困難だった時代のことを、若い人たちはどのように受けとめるのか、この機会にかぎらず何度も問い直していくべきだと思います」

すべてが可視化されてしまった感のある現代だからこそ、未知への探求、その文化の継承が必要なのではないだろうか。

東西南北

日華友好玉山開山祭と記念登山

宮川美知子

玉山開山祭と玉山登山の招待を、
中華民国山岳協会と玉山国家公园
管理处より受け、日本山岳会から
14名が参加した。

3月5日、桃園中正国際空港に
着くと、陳劉茂松氏と林哲全氏ら
中華民国山岳協会の方々が出迎え
てくださり、車で一路東埔村を目
指す。夕方には山岳地帯に住むブ
ヌン族原住民の「玉山—布農祈福
之夜」という祭りに参加する。会
場では、美しい民族衣装を身にま
とった人たちが、歌や踊りを披露。
一角にはブヌン族の珍しい料理が
並べられ、私たちはパーティのな
かへ自然と溶け込んでいった。

6日は玉山開山祭参加のため、
上東埔へ移動する。広場には台湾

会員の皆様のご意見、エッセイ、
俳句、短歌、詩などを掲載する
ページです。どしどしご投稿く
ださい。（紙面に限りがありま
すので、1点につき1000字程
度をお願いします）



強風のなか、全員登頂した玉山頂上で

の各地域で活躍されている登山関
係者の人たちが集まり、外国人招
待者のなかに吉永英明隊長の姿も
あった。隊長は、同時通訳付きで
招待を受けた謝意と、日華山岳会
の友好親善の歴史的経緯を述べた。
式典の最後には、玉山に登る登山
隊のピッケルやストックを集めて、

安全祈願する一幕もあった。

式典終了後は、標高2610mの
塔塔加登山口に入り、晴れ渡つ
た山なみの上方に雪をいただいた
玉山を見た。昼過ぎには、林哲全
氏を先頭に標高3402mの排雲
山荘を目指し歩きだす。途中、ニ
イタカツツジ、紫や白色のスミレ、
休憩場所にひよっこり現われた画
眉鳥を目にとめながら、18時ごろ
山荘に着く。

7日4時40分、山荘を出発する。
暗闇から朝日の明るさに変わり、
樹林帯を過ぎると崩れやすい岩稜
帯へ出た。上方にアイスバーンの
上に雪をのせた斜面が現われ、林
氏に従い雪面をトラバースして登
っていく。玉山主峰（3952m）
直下では強風を受けながらも、8
時ごろには全員登頂した。頂上で
20分のパノラマを堪能した後、下
山開始。雪面では要所にロープを
渡し確保してもらう。山荘からは、
山道に架けられた86個の木橋を渡
り、一気に塔塔加登山口まで下山
する。

8日、台北へ向けての移動の途
中に立ち寄った「新高登山口」の
苔むした石塔を見て、富士山より
高い山として新高山と名づけ、登

山道を開拓した先人たちの足跡を
眼下の林の中にイメージした。

その夜の日華親善交流会では、
神崎副会長も列席するなか、日本
山岳会百周年のおり来日された、
理事長の謝長顯氏のあいさつがあ
った。私たち日本山岳会登山隊は、
協会の方から一人ひとり玉山登頂
証明書を授与された。

今回の登山で、中華民国山岳協
会の方、各地で接した地元の方、
さらに日本山岳会の同行の方々に、
大変お世話になったことを感謝し
敬意を表したい。

北限の富士山展望

大内賢治

富士山に見える北限の山をパソコンのシミュレーションによって、1994年に、福島県・日山（1057・6^{メートル}）、麓山（^{はやま}羽山）（897・1^{メートル}）から南南西方向に遠く、直線距離で298・97^{キロメートル}先の富士山が望めることがわかり、山岳展望愛好家の現地探索が続けられてきた。

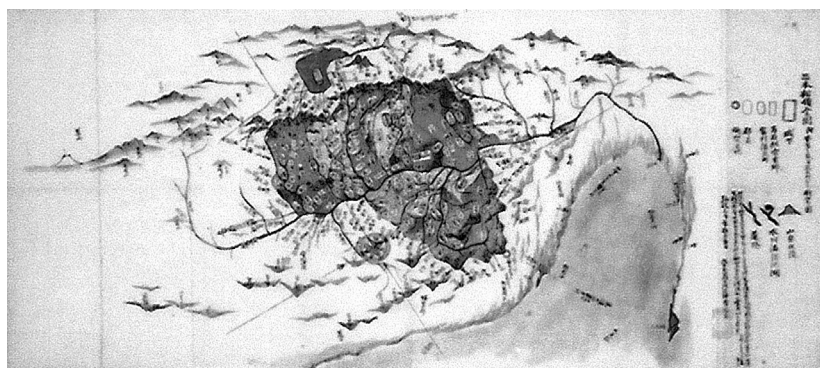
2000年1月10日、ようやく福島県・郡山市の鈴木一雄氏の30回余りにわたる挑戦によって、日山（北緯37度32分23秒）から撮影に成功、北限の山として実証された。

また00年12月30日、阿部正博氏が麓山（北緯37度33分35秒）からの撮影に成功し、北限の記録が更新（日山は直線距離で約1^{キロメートル}遠い）されたことによって、新たに北へ約9^{キロメートル}の花塚山（918^{メートル}）からも見える可能性も高まっている。

だが、弘化3（1846）年、二本松藩・郡奉行職にあった下河辺行簡は、文政8（1825）年10月2日に、高大師山から富士山

を認めたこととし、紙本着色の領内図に、10カ所の眺望地から遠望した山々を描き、由緒の追書きを添えて『二本松領全図附安多々良并高大師山ヨリ眺望ノ図』を残している。

その追書の一文、「高大師山〓現在地元記名は高太石山（847^{メートル}）にこうある、



『二本松領全図附安多々良并高大師山ヨリ眺望ノ図』より

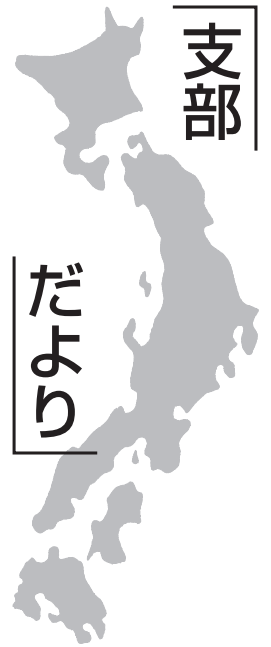
「余 若年之頃 御領中全図を仕立て 諸山脈之地を選び 磁石を立て方角を定めけるに 上長折十万郷に如くはなし 安積は大槻村ハナレ森最も宜し このほか名倉山 日山 羽山も宜しといへども 山木屋高大師山最上也 御領分中にこれ無し 岩城相馬仙台迄海上一瞬に見ゆる 日山も海辺少しく見るといへども 山と山との間よりみる 高大師ハ海を遮る山一ヶ所もこれ無く 金花山などもっとも近く見る 北に湯殿山 西南二筑波 那須 日光山見る又その末 二富士山と覚しき山雪を戴き白妙に見ゆる 余り希有なる故に村役人に尋けるに むかし御郡代渡辺岡右衛門様御廻村のみぎり 日山へ御登山の砌 富士山と御定めなされ候旨 仰せ聞かされ候事あれ候間 この所も相見当り申す旨申し聞き候う間いと珍しく思ひければ 日本之名山 富士 筑波 湯殿山 金花山迄一時二眺望之図を認め置きけるを 渡辺竹窓先生の需に應じて この度写し畢る」と述べている。

眺望地のひとつの「上長折十万

郷」は、阿武隈山系の尾根道に沿って点在する小さな集落の小高い里山にある。安達太良山を背景に二本松藩・丹羽家十万石の霞ヶ城が望まれ、山麓に広がる十万石の領内が一望できるところから十万郷といわれ、地域の有志によって昭和3（1928）年に建立された二本松藩・初代藩主「光重公展望之処」の碑は、いまに伝える証となっている。

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

秋田支部

設立50周年記念式典・祝賀会

支部設立50周年記念式典・祝賀会は、平成21年11月28日、乳頭温泉郷・鶴の湯温泉において開催された。宮崎副会長はじめ、東北各支部、秋田支部会員等、総勢46名が参加して盛会に行なわれた。

式典会場は、鶴の湯温泉別館「山の宿」の集会室。集会室の前には初代荒巻支部長や、設立当時の会山行記念写真、近年の秋田支部活動（訪韓・訪台登山、分水嶺踏査、長岩名譽顧問の「焼石岳の自然」等の写真が賑やかに飾られた。

14時、式典は今野（昌）副支部長の司会で始まり、まず、物故会員への黙祷が行なわれた。佐々木支部長からは、「記念すべき設立50周年を迎え、先輩諸氏のご尽力に感謝し、今後の支部運営を会員皆さんのご協力ですます発展すること

とを祈る」とのあいさつがあった。

続いて、設立会員である保坂隆司、進藤昭、長岩嘉悦、安藤武敏の4名の秋田支部名誉顧問に感謝を込めて、支部から記念品が贈呈された。次に、宮崎副会長から祝詞をいただき、また、公益法人に移行するための諸問題、会員の高齢化、若年者の加入、「山の日」の活動、森づくり、支部の活性化等、日本山岳会が現在抱えている問題点についてお話をいただいた。休憩の後、佐々木支部長の進行で、50年前の秋田支部設立の経緯、当時の県登山界の様子等を話題に、名誉顧問の座談会が行なわれた。まず、保坂名誉顧問から、昭和36年の秋田国体に登山競技を招致するためになんととしても秋田支部設立をしなければならなかった中で、荒巻初代支部長と共に設立に向けて行動を起こし、設立にこぎつけたこと。進藤名誉顧問は、戦



祝賀会でのカプセルオープンセレモニー

前戦後の登山の様子、当時の装備などの話、安藤名誉顧問からは、鳥海山北面登山と入会当時のこと、近年の「鳥海山の日」の事など、長岩名誉顧問は、焼石岳に初めて県体育大会を誘致したこと、国体や県体とのかかわりや焼石岳に対する思い等を話された。

最後に40周年以降入会した会員を代表して、佐々木（長）会員から、「長い歴史のある日本山岳会秋田支部に入会して、先輩諸氏のお話を聞く事ができ、大変勉強になった。これからも会の発展に協力をしてゆきたい」との言葉で式典は終了した。

諸連絡の後、記念撮影をして、

祝賀会場へと移動。祝賀会は鶴の湯温泉本館広間で18時30分、柴田委員の司会で行なわれた。今野副支部長の挨拶にはじまり、東北各支部を代表して、佐藤山形支部長から祝詞をいただき、保坂名誉顧問の乾杯の発声で懇親会が始まった。

鶴の湯温泉経営者の佐藤（和）会員の歓迎の言葉の後、鎌田委員らにより、40周年時に太平山・前岳に埋設し、今回掘り起こされたカプセルオープンとなった。支部長と進藤名誉顧問がリボンを解くと、中から支部40周年記念誌や手拭、会員名簿等も現われた。そして、23通の封書がそれぞれ投函した会員に手渡された。どんな事を記入したのかも忘れていたようで、懐かしげに見入っていた。ひとしきり懇談が続いた後、アトラクションとして、地元の正調生保内節などの民謡と手踊りが賑やかに披露された。

祝賀会は、東北各支部から参加した方々や会員同士の交流が和やかに続けられた。宴は、長岩名誉顧問のお開きの一本締めで終了したが、二次会は休憩室で延々と続いた。

（鈴木裕子）

京都支部

第13回「森の勉強会」

第13回「森の勉強会」が、09年10月31日から11月1日に日本山岳会東海支部・関西支部・京都支部自然保護委員会(部会)の共催で京都府南丹市美山町の芦生で開催された。参加者は40名(日帰り組講師、インストラクターを含む)で、森の勉強会としては盛況であった。

伊勢の神宮の森での開催がしばらく続いてしたが、今回は「芦生演習林」ということで、京都支部が担当となった。宿泊の関係で、定員36名までしか受け入れられず、参加をお断りした方にはお詫び申しあげる。

芦生演習林は、温暖帯落葉樹林帯から冷温帯落葉樹林帯へ移行する地域にある。気候的には日本海型から太平洋型への移行帯に位置するため、植物種が多いことで知られている。ヒトも動植物も森を失うと生きてはいけない。近年は、日本山岳会の各地の森づくりにも見られるように、「人工林」「里山」「奥山」も含めた多様な生態系との共存の問題も避けて通れない。

まず、日本最初の森林生態学者の四手井綱英氏の門下で、戦後の日本の登山史に大きな軌跡を残した岩坪五郎京都市立大学名誉教授の「人類と森林」である。CO₂をテーマとして、地球規模での人類の環境を守り、森林を維持するためには、原子力発電のことも含めて話され、辛口の踏み込んだ内容であった。

続いて、同じく門下の渡辺弘之京都市立大学名誉教授による、多様な生物の存在する「芦生の自然誌」についてである。芦生原生林の歴史、京都大学との関わり、現状など、土壌生物も含めて多彩なテーマで、多くのスライドを駆使された。

座学は、朽木學道舎師家の飯高転石師による「間伐更新と天然更新」「デューブ・エコロジーと林業」で、地元に暮らす人ならではの実践的な内容であった。

次に東海支部副支部長・猿投の森づくりの会代表の橋村一豊氏は、1999年から開催された「森の勉強会小史」を概説した。芦生から始まり、白山、伊勢の神宮の森、ボルネオの熱帯雨林、愛知県民の森と、「じつは山屋が森の事を何も

知らなかった反省から始まった」と、楽しくお話していただいた。

翌日、午後から天気が崩れるとの予報で早目に出発。自然観察コースの班編成も、出来るだけ所属の組織の方が同じになるようにした。参加者を3班に分け、同じコースを10分間隔で出発。長治谷作業所まで林道をマイクロスバス等で許可を受けて走行。枕谷、三国峠に上がり稜線を西に野田畑峠、野田畑谷を下り、元の長治谷作業所に戻った。芦生の森の最奥コースである。正午から三国峠を野田畑峠手前に行く稜線で、天気が崩れだした。多様な自然が残るといわれる芦生演習林であったが、経年的に観察している者には、近年はシカの食害等で多様性が失われつつあるのを感じた。

尾瀬の長蔵小屋の平野紀子さんは「憧れの芦生の森は素晴らしかった」と感想を送ってくれた。京都支部の角橋通弘さんは「不思議と申しますか、偶然の一致と申しますか、11月4日の京都新聞夕刊にシカ食害と昆虫減少との記事を見ました。新聞の写真のごとく、三国峠から野田畑峠、野田畑谷は落ち葉だけでなんの緑も見ること

とがなかったです。地球温暖化の間接的影響か、と記事にされていましたこと、実感した次第です」と、今回の芦生の自然観察会の感想述べておられた。

次の「第14回森の勉強会」は、関西支部担当で伊勢の神宮の森で開催予定である。

(伊原哲士)

福岡支部

「岳人のつどい」開く

福岡支部では、恒例の新年会を兼ねて、2010年1月23日、「岳人のつどい」を福岡市中央区天神の平和楼ホールで開いた。一昨年末では支部会員を対象にした集まりであったが、昨年从他支部や他山岳団体、一般の登山愛好者にも広く参加を呼びかけた結果、出席者も大幅に増加、今年は75名が集まり、メディアによる取材も行なわれた。

当日は15時に開会。副島勝人支部長のあいさつの後、斉藤篤司氏(九州大学健康科学センター准教授)による「山でバテない体力と心構え」というタイトルの講演が行なわれた。



好評だった「山でバテない心構え」の講演会

齊藤准教授は、同大学で運動生理学と運動栄養学を専門に研究するかわら、登山医学会評議員も務めている。またネパールでの健康調査や、福岡県内での継続した登山者の体力測定や「運動能力測定山行」を実施。その成果は、『健康になる九州の山歩き』(09年7月、西日本新聞社刊)の監修出版や、山の専門誌『岳人』(09年9月号)に執筆した「鍛えた体力を生かして縦走するために・からだトラブル対処法Q&A」などに発表されている。

講演では、「山でバテる」原因には大きく分けて、①水バテ、②シヤリバテ、③気持ちバテの3つが

あり、これらを放っておくと事故につながる指摘した。齊藤准教授の調査と研究に基づく体調管理や、山でのトラブルの予防・防御の方法などを詳しくお話ししていた。1時間30分を超える講演は、大変好評で質問も相次いだ。

また、会場では日本山岳会が提案する「山の日」制定キャンペーンも展開された。キャンペーンは、支部長によるアピールのほか、趣旨を掲載したチラシの配布、さらに会場正面の舞台に大きな垂れ幕を下げ、大々的にPRされた。

17時からは、同じ会場で講演者の齊藤准教授を囲んで懇親会を開催。中華料理のコースにビールやお酒も加わって大いに盛り上がり、あちこちで歓談の輪ができ、岳人たちの熱い語らいは2時間以上も続いた。

宴の途中、この会を後援、会員も参加していただいた福岡県山岳連盟の安達敏則会長、福岡県勤労者山岳連盟の荒木辰彦会長らより、ごあいさつをいただき、岳人たちの結束を確認し、登山活動のさらなる発展を誓う場ともなった。

(高木莊輔)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

科学委員会

フォーラム「登山の科学」を開催

フォーラム「登山を楽しくする科学(Ⅱ)」が3月22日に飯田橋の東京仕事センターで開催され、一般も含め約140人が参加した。4テーマに各講師が、それぞれ映像を駆使しての講演であった。

最初は塩田純一医療委員長の「低体温症の生理学」である。「低体温症から凍死するというのは、体の中心温度が30度以下になって死に至る」というところから説き起こし、ふるえなどの症状、早めの対策や防ぐ方法などを自分のヒマラヤ体験も交えて具体的に解説した。

2番目は、芳野赳夫科学委員(電気通信大名誉教授)が登壇。「カミナリの新理論」と題して、今までの常識を覆す避雷姿勢を説明した。

体内に電流を流さないために、両足をそろえてしゃがみ、閃光と大音響から守るために眼を閉じ耳をふさぐ。一点接地の新理論だ。従来の体を伏せて金属を身体から離すという方法は役に立たないという話に、聴衆は感心して聞き入っていた。

3番目は福岡孝昭委員(立正大学地球環境科学部)による「温泉の自然学」である。地球最初の温泉は40億年前の海だと聞いて、聴衆はまずびっくり。どうして温泉ができるのかを、マグマや地殻の構造から説明した。馴染みのある火山性温泉の他にも、深層地下水や化石海水があり、さらには造成温泉やニセ温泉と話を展開した。

最後のテーマは、平野裕也委員(森林セラピスト)の「森林セラピー入門学」。また、耳慣れない森林セラピーという言葉の意味を丁寧に解説。森林浴が心身にいいこ

とは知られているが、最近、その効果について科学的に測定され、療法として確立しつつあるという。信濃町のセラピー基地をモデルに、森林療法を会場で模擬体験してもらう工夫がよかった。

フォーラム終了後、初めて参加者へのアンケートを実施した。回答は参加者の約8割にあたる106名で、満足度のたかい内容であったことをうかがわせるものであった。詳細は全体的に「大変良かった」55パーセント、「良かった」23パーセントで、テーマ別では、「大変良かった」とする回答が「低体温症」91パーセント、「カミナリ」93パーセントで、登山の安心・安全に強い関心があることが裏づけ



「温泉の自然学」について解説する福岡孝昭氏

られた。

また、これから「取り上げてほしいテーマ」については、気象、読図、技術、安全など幅広い要望が寄せられた。来年のフォーラムに生かしていく方針だ。

＊

なお、資料に余部があるので、関心のある方には1部500円でお譲りします。連絡先(米倉久邦) 090-1579015052

✉ yonekura.hisakuni@kyodonews.jp)

(米倉久邦)

集会委員会

第7回土曜懇話会

3月6日15時～17時、上智大学九号館二五六教室に堂本暁子評議員をお迎えし、「日本山岳会との六十年 山に遊び 自然を学ぶ」と題して、土曜懇話会を開催した。出席者は20名であった。

前半は、堂本さんと山登りの関わり、JACの出会いと思い出を中心に、興味深いお話をお聴きした。

「皆貧しく物も不足していた戦後間もないとき(マナスル)が日本人の夢だった時代、丹沢の水無川

の沢登りから、三ツ峠、尾瀬、八ヶ岳と山行をはじめた。女子大としてはじめて山岳部をつくり、2年生の時JAC学生部の門を叩き、当時の御茶ノ水のルームに日参した。横さん、成瀬さん、三田さん、山田さんをはじめ錚錚たる先輩たちに指導を受け、都会でも山でも仲良くしていただいた。今となつてみると本当に「贅沢な」経験だった。JACには「登山文化」があった」と思い出を語られた。

さらに、社会人になられてからも、日本女性マナスル登山隊への同行、どうしても行きたかったチベットの行、北極への取材等と山との関わりは続いた。政治家になつてからは少し山と疎遠になったが、千葉県知事を引退したときに、評議員へのお話があり、青春を燃焼させたJACに恩返しをしたいとの思いで今務めている。「帰るところがあつてよかったね」と言われたのが本当に嬉しかったという。

後半は、「山と生物多様性」をテーマにパワーポイントを使って、46億年かけてつくられた地球上の生態系・3000万種と言われる生物の多様性とその意義、それを守っていくことの大切さ、そして

国内外での堂本さんの環境や自然保護への取り組み内容、今後の問題点等について堂本さんの知見の数々をお聴きした。

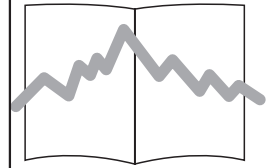
「今は、同じリオデジャネイロの〈地球サミット〉で採択された地球温暖化対策に目が向いているが、〈生物多様性〉への取り組みもきわめて大切である。特に、今年は国連の〈国際生物多様性年〉であり、また10月には名古屋でCOP10〈第十回条約締約国会議〉が予定されている大変重要な年である。

日本としては、〈里山〉について発信していくことが必要と考えている」と、千葉県知事として自ら推進された具体的な取り組みも含めお話された。JAC会員としても、何が出来なのか、何をすべきなのか考えさせられるとともに今後の活動に大いに参考になるお話であった。

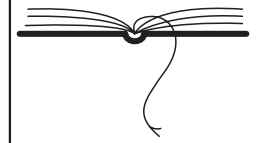
最後に、出席者全員と環境問題や自然保護について、ざっくばらんな意見交換を行なつて、会は終了となった。

なおこの催しは、自然保護委員会協賛にて開催された。

(清登緑郎)

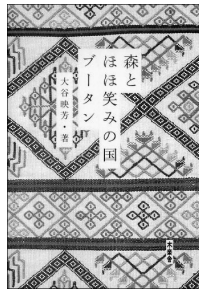


図書紹介



大谷映芳・著

『森とほほ笑みの国ブータン』



2009年11月
木楽舎刊
A5判 207頁
定価 1890円

鳩山政権でも経済の新成長戦略に国民の幸福度を取り入れようと試みているようだが、ブータン王国は、世界に先駆けて国民総幸福量（GNH）を提唱した国として注目されている。

国民総幸福量という概念を生んだブータン国民の幸せとは何か。著者は、ブータン各地で見聞した人々の日々の営みや祭りの様子、東ヒマラヤの自然の素晴らしさを綴り、その答えを探す。人だけでなく犬の幸福量についても語るのがいかにもブータンらしいが、楽しい話題ばかりでもない。社会問

題や政治課題も粗上に載る。

全体の四割程度を、著者が四半世紀にわたり撮りためた写真が占めている。すでに歴史の一部となつてしまった情景もあり、貴重な記録だが、文章を中断する構成となつてしまったのは残念だ。

チベット仏教を国教とし、特異な風俗や景観で日本人に郷愁を感じさせるブータンが「心のふるさとのような気がする」著者は、あとがきで「褒め過ぎたか」と書いている。ジャーナリストとしての心配だろう。確かに、負の部分を手折り過ぎた嫌いはあるかもしれない。彼の国も同じく人の住むところ、褒められない部分もたくさんある。気候は厳しいし、地域格差も大きい。難民問題では非難を浴びている。私の現地の友人は、迎えてくれる笑顔も変わらないが、噂話に潜むさりげない体制批判も変わらない。だが、私もブータン

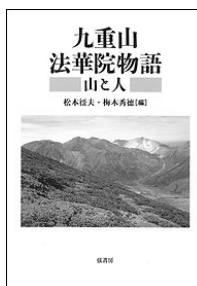
は居心地がよい。批判よりも褒め言葉が多くなるのは理解できる。

本書は、地理、歴史、風俗、旅情報と、平易なブータン解説書としてもお勧めである。カバーにブータン織布の写真を配し、主張し過ぎない装丁は好感が持てる。

些末ではあるが気になったことが一つ。取材旅行時の集合写真で、スタッフの一人の足指えが妙だ。まさか、この格好で歩いたのではないと思うが。（國見ゆみ子）

松本徃夫、梅木秀徳・編著

『九重山 法華院物語 山と人』



2010年3月
弦書房刊
A5判 272頁
定価 2100円

九州登山のメッカ、九重山と法華院の歴史を詳しく教えてくれる本がようやく出た。

「九重山」は久住山や大船山、三俣山など連山の総称で、その山々に囲まれた中心に坊がつるの高原湿地があり、法華院がある。四季を通じて多くの登山者で賑わう。だが法華院が古くからの温泉地

だと知る人も、そこが数百年以上も前に開山された山岳霊場であり、白水寺法華院があったことを知る人は少ない。坊がつるがダム建設阻止へ九州で最初の運動へと盛り上がり、自然環境と景観が守られた地であることを知る人も、今は何人いるだろうか。

それは九重山に関係した図書やガイドブックは多くても、その故事来歴に触れた書物がほとんどなかったことにもよるだろう。今回、その歴史、沿革にスポットをあて、丁寧にもどきながら九重の山々とかかわってきた人たちの実績をエピソードとともに記されたのが本書である。

法華院は1324（正中元）年、山名は「九重」、寺号は「白水」、院号は「法華」、坊称を「弘藏」とした天台宗の霊場が開かれたことに始まり、1470（文明2）年には養順法師により修験道場が建てられた、と第一章の「九重山法華院」に詳しいが、その裏づけとして本書は『九重山記』を基に説明している。

『九重山記』は1770（明和7）年、法華院を訪れた竹田・英雄寺の住職芳梅閣によりまとめられた

もので、梅間直筆の巻物が今も法華院弘藏家に所蔵されている。だが、閲覧の機会があっても漢文書なので容易に読めない。それが第五章の「九重山記」では現代語に訳して収められている。訳者のご苦労のお陰で、読む側は勞せず古記録や二百年以上前の九重山の様子を知ることができる。

第二章の「法華院五輪塔」では工藤元平、加藤数功、立石敏雄ら大正から昭和にかけて九重山登山を開拓した先駆者6氏のパイオニアワークが語られ、第三章「九重の自然と山岳文化」では九重火山の生い立ちや山名の由来、自然保護の沿革にも触れており、学ぶことが多い山岳史の1冊である。

主編著者の松本健夫氏と梅木秀徳氏はともに、かつて法華院の山小屋で旧制広島高師(現広島大山岳部歌を基に、ヒット曲になった「坊がつる讃歌」を作詞した仲だ。松本氏は山口大名誉教授(地質学)で探検登山の著書も多く、梅木氏は元大分合同新聞論説委員長。手慣れた執筆の文章は読みやすく、読みごたえがある。

(松尾良彦)

日本山岳会東海支部・編著

『東海・北陸の200秀山』



上 東海・北陸編
2009年10月
中日新聞社刊
B5判 213頁
定価 1799円



下 東海・信州編
2009年10月
中日新聞社刊
B5判 233頁
定価 1799円

東海支部の力作。山のガイドブックとしてはかなりの大判で、しかも上下巻である。

たまたま私は名古屋の書店で上下巻が並んで平積みになっていたのを見た。こうすると表紙の写真がつながって、鈴鹿山地を代表する御在所岳と鎌ヶ岳が夕空にシルエットで並ぶ。本の大きさとあいまって、なかなか目立つ演出となっていた。

この本の読者の多くは名古屋とその周辺の住人だろうが、そこから遠く離れた北陸の山にまで紹介が及ぶのは書名にあるとおり。これは東海北陸自動車道の開通で、プローチしやすくなったため、

本の副題にも「高速道路からのアクセス」とある。

私も一時期を過ごした経験上、名古屋は大会に於いては渋滞に悩まされることが少ないように思う。また中部山岳へ出かけるのにまことに都合のいい立地である。今や地方のバス路線が衰退していることもあって、放射状に整備された高速道路を利用してのマイカー登山が主流になるのは当然だろう。もっとも、これは全国的な傾向でもある。

マイカーは山頂を近くしたが、それは鉄道やバスで時間短縮をはかるのと質的に変わるものではない。

登山という遊びは文明の落とし子で、不便を楽しむために便利を求めるという矛盾をはらんでいる。そして便利が不便に侵食してきたのがこれまでの登山の歴史だった。現代においてはその便利をどこまで許すかが各人の登山観を表わすことにもなるだろう。ただ、これまでの「現代」は常にそれらの便利の頂点であったが、これからもうなにか。もしそうなら、便利がついには登山から何を奪い去るのかは誰にもわからない。

ガイドブックはインターネットの便利に押されて旗色が悪いが、これも「現代」というものだろう。だが、例えばこの本のように二百もの山の情報を手の中に、ぱらぱらとページをめくりながら概観することは本にしかできない。本という形態に愛着のある私は、支部員の手弁当で出来上がったようなこのガイドブックが多く長く読者の手に渡るよう期待している。そのためには、改訂の機会には、駐車場情報と地図をさらに充実させることをお願いしたいと思う。

(長沢 洋)



平成21年度第11回（3月度）理事会
日時 平成22年3月17日 18時35分～20時45分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 尾上会長、神崎・宮崎・

藤本各副会長、成川・岡部

各常務理事、太田・堀井・

相馬・山川・野澤・谷川・

永田各理事、深川監事、近

藤・酒井・森各常任評議員

【委任】 中山・萩原各理事、平井監事

【審議事項】

1・基金運用規定の制定（岡部）

当会の基金の運用に関する規定が整備されていないので、基金運用規定を定めたい。規程案を財務委員会に諮り作成するので次回審議したい。

（継続）

2・三国学生友好登山協定書（宮崎）

2008年から実施の日中韓三国学生友好登山について、2010

0年から2015年の間の友好登山実施要領の協定を締結したい。この協定締結は中国登山協会からの強い要望に基づくものである。

（承認）

3・登山道情報交換に関する協力協定（宮崎）

国土地理院が整備する登山道情報（正確性の維持・向上と登山者等の安全性向上に資するため、登山道情報交換についての協力協定締結の申し出が国土地理院からあり、その主旨からして協定を締結したい。民間団体等とのこの種協定はJ A Cが最初である。協定締結に伴い、J A Cにおける情報取りまとめ事務等の体制づくりを急ぎたい。

（承認）

4・海外登山クロニクルへの協賛（神崎）

日本山岳会エベレスト登頂40周年を記念して日本山岳協会と協賛で5回の海外登山クロニクル・ト

ークショー（19ページ参照）を開催計画している。なお、第1回目として「The EVEREST Day」が4月24日（土）に国立オリンピック記念青少年センターで開催される。

（承認）

5・埼玉支部の設立申請（神崎）

30番目の支部として埼玉支部設立発起人会（代表 石橋正美会員）から支部設立趣意書、発起人名簿（35名）、支部規約（案）、支部役員候補名簿（案）、支部事業計画（案）等を添えて設立申請があった。設立総会は4月4日（日）を予定。

（承認）

【報告事項】

1・法人改革対応検討プロジェクトチーム中間報告（藤本）

昨年9月25日以降7回の会議を開催し、その間公益社団・一般社団への移行に伴うメリット・デメリットの精査、公益目的事業仕分とその事業費試算、併せて類似団体等の動向、既公益認定法人の申請内容、最近の「公益認定等委員会」における公益判断状況に関する情報収集などにつき関連資料を添付して中間報告がなされた。

2・平成21年度第3回評議員会報告（宮崎）

3月6日（土）、本年度第3回目の評議員会を開催（評議員18名中13名出席）し、平成21年度第2回通常総会議案について説明し意見を聴き、議案は原案通り了解された。

3・平成21年度第2回通常総会報告（宮崎）

3月13日（土）、本年度第2回通常総会が開催（千代田区六番町のプラザエフ、会員総数52551名中、出席3024名、委任状分を含む）され、満場一致で議案は可決された。

4・屋外物置の整理（宮崎）

マンション理事会より保安上の支障となるため屋外物置の撤去を求められているため、物置の整理を早急に実施するよう関係委員会等に依頼した。

5・所有写真使用依頼（宮崎）

A A F (Asian Architecture Friendship) N G O 竹中工務店設計部有志で組織する建設支援ボランティア団体から松浦輝夫会員のエベレスト登頂シーンの写真を「ヒマラヤの学校建設その後」の展示イベントで使用したい旨の依頼があり、資料委員会により写真使用許可済。

6・同好会の新規登録（バックカ

ントリークラブ(宮崎)

山岳スキーを中心とした登山を

主たる活動とする同好会(代表者

・野間啓太、設立2010年3月

3日)で、同好会登録申請があり

受理した。JACYOUTH

PTのメンバーが主たるメンバー

である(現在会員は25名)。

7・財団法人自然公園財団の評議

員会開催案内(宮崎)

JACC会長が評議員である自然

公園財団の21年度第2回評議員会

開催(3月16日)案内があった。

委任欠席。

8・フォーラム「公益法人の新制度

対応について」の開催案内(宮崎)

掲記フォーラムを文部科学省競

技スポーツ課が3月30日(火)に開催

する案内情報提供が、あずさ監査

法人からあった。フォーラムは即

日満席となり参加できなかった。

9・プロジェクトチーム報告(藤

本、神崎、成川、野澤)

法人改革対応検討プロジェクト

チーム(以下PT)、支部活性化P

T、山の日制定PTおよびJACC

IYOUTH PTの活動・取り

組み状況についての報告があった。

10・会報「山」4月号編集報告(神

長)

ルーム日誌 3月

1日 総務委員会

2日 図書委員会 アルパインスケッ

チクラブ 山の自然学研究会

3日 集会委員会 海外委員会

指導委員会

4日 アルパインフォトビデオクラブ

5日 みちのり山の会

6日 評議員会 図書委員会

8日 指導委員会 インターネット

小委員会 アルパインスキーク

ラブ 高尾の森づくりの会

9日 アルパインスケッチクラブ

10日 常務理事会 山岳地理クラブ

11日 海外委員会 アルパインスキー

クラブ 山の自然学研究会

12日 資料映像委員会 システム

プロジェクト 九五会

15日 総務委員会 会報編集委員

会 資料映像委員会 アル

パインスケッチクラブ

16日 山岳研究所運営委員会 イ

ンターネット小委員会 アルパ

インスキークラブ 00会

17日 理事会 山の日制定PT

三水会 つくも会

18日 科学委員会 山遊会

アルパインスケッチクラブ

山の日制定PT

23日 自然保護委員会 インターネ

ット小委員会 ゆきわり会

24日 自然保護委員会 海外委員

会 JACYOUTH

PT システムPT 麗山会

30日 学生部 支部活性化PT

31日 東京多摩支部

3月来至者588名

会員異動(3月)

物故

若林啓之助(2824) 10・3・13

太田浩史(4131) 09・3・15

中村一雄(4352) 10・3・22

音成彦始郎(4769) 10・3・20

嶋崎兵市(5599) 10・2・21

齋藤 満(6176) 10・3・1

木名瀬巨(7389) 10・2・23

柳沢昭夫(8687) 10・3・23

寺西申生(8790) 10・3・17

沼 賢亮(9676) 09・10・10

別所宗郎(14274) 10・3・29

退会

岳峰会(4319) 福島

塚本正利(5586) 関西

平野興一(5858) 福島

岡部正敏(6572) 福島

篠田勝久(6985) 福島

上田 正(7114) 東海

豊島義明(7340) 東海

堀口徹夫(7549) 岩手

広木孝一(7719) 茨城

小荒井実(8859) 越後

中村喜美(9117)

三橋 勉(9614) 京都

椿居澄子(10908)

真嶋花子(10293) 北海道

横内泰美(10687) 北海道

山上郁子(10814) 北海道

加賀谷立身(11146) 秋田

黒沢 孝(11161) 関西

高野昭吾(11168) 京都

宮崎専輔(11272)

小林潤也(11303)

木俣美樹男(11309)

小林妙子(11364)

加藤久雄(11441) 京都

矢羽々文一郎(11521) 岩手

水畑靖代(11865) 東海

中村和輝(11926) 福岡

坂神列一郎(11945) 東海

有本重昭(12562) 宮崎

井上 彰(12696) 京都

堀江召浩(12797) 東海

黒木登志夫(12843) 岐阜

内田 孝(12963)

伊藤建介(12998)

佐々木國雄(13008) 宮城

新井律子(13055) 宮崎

日高佐智代(13068) 宮崎

金 炳哲(13258) 北九州

河野利晴(13324) 山陰

横須賀邦子(13632) 北海道

高橋友子(13440)

森永義忠(13983) 北九州

大平昭善(14111)



インフォメーション

◆新入会員のための企画「徳本峠越えとウェストン祭」

山研運営委員会

ウォルター・ウェストンの足跡をたどり、新緑の島々谷から残雪の徳本峠を越えて上高地入りします。上高地では山研に1泊して、翌日「碑前祭」に参加。新会員の仲間づくりを手助けする企画です。

日程 6月5日(土)～6日(日)

費用 1万2000円(1泊2食、午餐会費、記念品代、傷害保険料)

定員

20名(21年度入会の会員および本会会員の希望者)

第12回「秩父宮記念山岳賞」の推薦について

秩父宮記念山岳賞審査委員会第12回「秩父宮記念山岳賞」の推薦(他薦のみ)を下記の通り受け付けますので事務局まで資料をご請求下さい。

多数の推薦をお待ちしております。

- 対象分野 登山活動
山に関する文化活動
- 提出先 日本山岳会内
秩父宮記念山岳賞事務局
- 締切り 平成22年8月末日

申込 5月22日までに、柴山信夫

(TEL) 044-9000-3439

✉ siban@sannet.ne.jp

*現地集合・解散

*申込者に詳細を送ります

◆第8回土曜懇話会「自然エネルギー発電の現状と課題」

集会委員会

日時 6月19日(土)15時より

場所 日本山岳会104号室

講師 森武昭氏(常任評議員、神奈川工科大学副学長・教授)

定員 30名

問合 野崎和彦 (TEL) 090-18961-1866

✉ nozaki_kaz@yahoo.co.jp

◆第10回生物多様性条約締約国会議記念森林講座

猿投の森づくりの会

森は木々と生物たちとの相互作用で成り立っているという最新の知見にたった、6人の生態学者による座学と自然観察会。参加費は

無料。会員外の参加も可。

日時 ①4月10日(土)総論(1回目)

②5月15日(土)鳥類(2回目)

③6月12日(土)土壌(3回目)

④7月10日(土)獣類(4回目)

⑤8月7日(土)昆虫類(5回目)

⑥11月13日(土)菌類(6回目)

9時30分、ウインクあいち

(愛知県産業労働センター)

申込 各講座ごとに、往復ハガキ

1枚に1名で申し込む

(TEL) 460-0014名古屋市中区富士見

町8-8 OMCビル(社)

日本山岳会東海支部 猿投の森づくりの会

締切 ①終了 ②4月30日

③5月16日 ④6月12日

⑤7月10日 ⑥10月16日

問合 小川務 (TEL & FAX) 0568-911-2486

✉ alaiclub@bridge.ocn.ne.jp

◆第6回「土曜放談会」土曜会

昔の土曜会のスタイルを踏襲して開催、どなたでも参加できます。

日時 5月29日(土)15時～17時30分

場所 日本山岳会集會室

費用 1000円

問合 箕岡三穂 (FAX) 042-17761-1788

✉ kftc1937@theia.ocn.ne.jp

図書受入報告(2010年3月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
能島龍三	夏雲	286p/20cm	新日本出版社	2010	出版社寄贈
落合正治(編)	七つの大陸の最高峰を訪ねて	83p/21×30cm	神大セブンサミツ実行委員会	2010	発行者寄贈
落合正治(編)	神奈川大学ピンソン・マシフ遠征登山隊2009報告書	103p/30cm	神大セブンサミツ実行委員会	2010	発行者寄贈
ライチョウ会議(編)	第10回ライチョウ会議新潟大会報告書 :2009年11月2～3日	163p/30cm	ライチョウ会議	2010	発行者寄贈
近藤等	わが回想のアルプス—Les Alpes que J'aime	191p/21cm	東京新聞出版部	2010	出版社寄贈
トムラウシ山遭難事故調査特別委員会(編)	トムラウシ山遭難事故調査報告書(平成22年3月1日)	91p/30cm	トムラウシ山遭難事故調査特別委員会	2010	発行者寄贈
裾野市実行委員会(編)	我がまち自慢の富士山—国民文化祭しずおか2009	112p/26cm	「我がまち自慢の富士山」写真展企画委員会	2009	発行者寄贈
池田末則(監修)	日本山岳ルーツ大辞典	1142p/27cm	竹書房	1997	図書委員会寄贈
若菜晃子(文)羽生知美(写真)	東京近郊ミニハイク	128p/18cm	昭文社	2010	出版社寄贈
Ameryki.Gory	Wielka Encyklopedia gor I Alpinizmu Tom IV	804p/25cm	Stapis	2009	J.Kielkowski氏寄贈
A.Tyson&M.Clelland	Glacier Mountaineering	140p/23cm	Falcon Guides	2009	大塚忠彦氏寄贈
Harish Kapadia(ed.)	The Himalayan Journal 2009 (Vol.65)	298p/22cm	The Himalayan Club	2009	発行者寄贈
Stephen Goodwin(ed.)	The Alpine Journal 2008 (Vol.113)	448p/23cm	The Alpine Club	2008	発行者寄贈
John Harlin III(ed.)	The American Alpine Journal 2009 (Vol.51,Issu.83)	400p/23cm	AAC Press	2009	発行者寄贈
Kester Brown(ed.)	New Zealand Alpine Journal 2009	148p/25cm	New Zealand Alpine Club	2009	発行者寄贈
Cally Henderson(ed.)	The Journal of the Mountain Club of South Africa 2008	163p/24cm	Mountain Club of South Africa	2009	発行者寄贈

海外登山隊クロニクル 年間企画一覧

海外委員会

イベント名	期 日	会 場	出演者 (予定)
The EVEREST Day	2010年 4月24日(土) 13:30-17:00	国立オリンピック 青少年センター	1970年エベレスト登山隊=大塚博美、松田雄一、 松浦輝夫、平林克敏 他、田部井淳子、渡邊玉枝
The UEMURA Day	2010年 7月24日(土) 13:30-17:00	毎日ホール	田部井淳子、植村公子、三浦豪太、竹内洋岳、 谷口ケイ その他
The EXPEDITION Day	2010年 9月11日(土) 13:30-17:00	国立オリンピック 青少年センター	若手現役登山隊による精鋭登山報告、海外登山史 「データにみるヒマラヤ登山」(企画・計画中)
The HIMALAYA Day	2010年12月 5日(日) 13:30-17:00	国立オリンピック 青少年センター	過去のビッグ・エクスペディション (企画・計画中)
The DOCUMENT Day	2011年 1月16日(日) 9:00-19:00	国立オリンピック青少年 センター(未定・申請中)	登山隊記録映画会(予定)『マナスルに立つ』『ナンダ コット登山隊』『白き氷河の果てに(K2)』その他

参加申込み=https://www.mainichi-ks.co.jp/form/evt-mt1004/ 問い合わせ=海外委員会(井本)imoto@himalaya-kanko.co.jp

【エベレスト登頂40周年記念・ヒマラヤトレッキングのご案内】

1970年 5月11日、日本山岳会エベレスト登山隊によって、日本人が初めて世界最高峰エベレストの山頂に立ちました。あれから40年——。日本山岳会海外委員会では、当会支部活性化プロジェクトチームと共同で、エベレスト登頂40周年を記念するヒマラヤトレッキングを企画しました。ご友人とお誘い合わせて、多くの方の参加をお待ちしております。

(A) エベレスト展望と4000mピーク登頂12日間

旅行期間=11月12日～23日 旅行代金=425,000円

エベレスト街道をトレッキング、ホテル・エベレスト・ビューに泊まり、4000mピーク登頂に挑戦します。

(B) ホテル・エベレスト・ビューと「ボカラ」を訪れる12日間

旅行期間=11月12日～23日 旅行代金=475,000円

エベレストを展望したその後は、温暖なボカラでアンナプルナ山群の展望を楽しむ欲張りな内容です。

(C) ヒマラヤ山脈8000m峰 9 座展望とハイキング10日間

旅行期間=11月15日～24日 旅行代金=398,000円

憧れの8000mの巨峰を地上からの軽いハイキングと航空機の機窓から眺める充実のコースです。

(D) エベレスト・カラパタール登頂20日間

旅行期間=11月 4日～23日 旅行代金=482,000円

ルクラからエベレスト街道を歩き、世界最高峰エベレストを間近に仰ぎ見るカラパタールへ登頂します。

(E) 最速カラパタール登頂15日間

旅行期間=11月 9日～23日 旅行代金=668,000円

低酸素トレーニング室を使った高所順応プログラムと特別機を使い5545mのカラパタールへ最も短い時間で登頂します。

旅行企画・実施 (A)・(B)ヒマラヤ観光開発(株) ☎03-3574-9292 (C)・(D)アルパインツアースービス(株) ☎03-3503-1911

(E)株ウェック・トレック ☎03-3437-8848

詳しくは、日本山岳会ホームページ <http://www.jac.or.jp/> をご覧ください。



◆編集後記◆

●総会の報告は、やはり若い会員の入会が急務であることを示唆しています。一方、古野さんのレポートにもあるように、未組織ですが若い人たちが山に少しずつ帰ってきました。雪山に挑む彼らには、技術に対して向上心があります。その向上心にきちんと応えていくことが、山岳会再生のひとつのカギになるような気がします。

●長野で開催されるブックフェアとトークショーは、異色の組み合わせもあって、今から楽しみです。●寒い日が続いたため、今年の桜は、ずいぶん長く楽しめました。そんな桜満開のある日、秩父を訪ねました。駅舎から出て、まず目に飛び込んでくるのが武甲山です。たまに訪れるためか、いつも武甲山の削られた無惨な姿に心が傷みます。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 779号

2010年(平成22年) 4月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 尾上 昇

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社